# 編集後記

本誌にとって、創刊号が刊行されてからのこの１年は試練とその克服の日々であった。ただでさえ、誕生間もない雑誌は試行錯誤を余儀なくされる。だが、学部機関誌たる本誌に襲い掛かってきた問題は紙質や余白といったテクニカルな領域を超えていた。個人負担か公費負担かで揺れた抜刷の問題、本学部の一教員と本誌編集委員会が謝罪の意を表するまでにいたった、大学院生による剽窃問題。いずれのケースも、編集会議や教授会の場ではもちろんのこと、本学部が居を構える本学20号館のいたるところで、公的・私的な議論と意見交換が絶え間なく繰り返された。ことに、研究モラルの低下とチェック体制の不備を指し示す剽窃問題は多くの先生方の関心を引き、私の行く先々で労いの言葉と励ましの声を聞くことができた。

剽窃は他人事ではない。教育に携わる者であれば、学部生のレポートやレジュメ、論文等で頻繁に目にし、対策と指導を迫られていることだろう。インターネットの普及と利用頻度の高まりは、ウェブ上にある情報をコピーのうえ貼り付ける単純な作業の横行を生み、苦労と努力の感じられない「力作」の枯渇をもたらした。引用の仕方を教えること、情報源の明示を心がけるよう指導すること、「参照」と称せられるようウェブ上にある文章を加工するよう促すこと…。現状に合わせた「あるべき指導の姿」とはこのようなものであろう。今回の問題は、知的訓練を受けた日数と経験度の違いがあるにもかかわらず、学部生と大学院生がさして変わらぬ状況にあることを白日の下にさらした。進学する前に身につけておくべき最低限のマナーと研究モラルが低下している（「欠落」とは表現すべきでない）ことは、大学院教育が建て直しを迫られていることを意味する。学部だけでなく大学院においても導入教育が必要になった証左と言えるのではないだろうか。

一時的な負担の増加を危惧する向きもあるかもしれない。しかしながら、導入教育を研究科規模で行わなかった結果、さらなる剽窃を生み出し、本誌が廃刊に追い込まれてしまってはもともこもない。たとえ、掲載される前に発覚、未然に防ぐことができたとしても、本誌に投稿する権利を大学院生全体から奪うことになってしまっては本末転倒である。 創刊号と本号の目次を今一度見てほしい。本誌の特徴の一つは、大学院生にも門戸を開き、積極的な寄稿を促している点にある。前途ある彼らのために飛躍の機会を提供すること、それは大学院教育に携わる者の務めと言えよう。大学院における導入教育の実施は、翻って、教員自身のモラルの再確認と強化に資すると思われる。剽窃への誘惑は学部生や大学院生に特有の病理ではない。私自身をはじめ教員の誰もが、この誘惑に負ける可能性を秘めている。幸いなことに、学部教育における導入教育は軌道に乗りはじめた。大学院がこれに続くことは、学生にとっても教員にとっても大きなメリットになる。

（野崎孝弘）